

歴史的視角から分析する東アジアの都市問題と環境問題

The Urban Environmental Management in the East Asia
from the Point of Historical Analysis

妹尾 達彦 (SEO TATSUHIKO)
中央大学・文学部・教授



研究の概要

5年間の研究成果は、文理融合の研究組織のもと、20回におよぶ海外共同調査をふまえて公刊された150篇をこす論著や、国内外における約50回の国際会議・研究会において明らかにした。都市と環境の歴史学の構築をめざす本研究によって、現在の人類が直面する都市と環境の問題に立脚した新しい歴史解釈の道が拓け、その結果、従来の歴史学の枠組みを超えて、人類史という、今求められている大きな分析枠組みの設定と歴史解釈を行うことが可能になった。

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学 東洋史

キーワード：都市・環境・歴史・黄土高原・農牧複合地帯・沿海地帯・環境遷移帯

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の研究状況をかえりみると、現代に生きる私たちの関心に即した歴史学が人々に強く求められていながらも、その要求に実際の研究が追いついていない状況だったといえる。

本研究は、このような研究状況をふまえて、都市問題と環境問題に揺れる現代人の関心に即した、現代にふさわしい新しい歴史学をつくりあげるためにスタートした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、歴史学の視角から、東アジアの都市と生態環境の相関関係を分析することで、現在の地球が直面する都市問題と環境問題の歴史的背景を探ることであり、都市と環境を鍵概念として、21世紀の地球にふさわしい歴史学を構築することである。

3. 研究の方法

本共同研究がとった方法は、(1)文理融合型の研究組織をつくることと、(2)各研究分担者の責任を明確化し、相互の研究の不断の交流と競争を促進することである。この方法によって、学問融合にもとづく人類史の包括的な仮説の提示をめざした。

4. 研究の主な成果

5年間の研究の成果は、本研究によって、現在の人類が直面する都市と環境の問題に立脚した歴史の解釈の道が拓け、その結果、従来の歴史学の枠組みを超えて、人類史という、より大きな分析枠組みの設定と歴史解釈が可能になった点である。

研究代表者をはじめ、研究分担者・研究協力が公刊した研究成果によって、主として以下の2つの仮説が提示され、各研究者によって多角的に検証された。

すなわち、(1)同じ環境と異なる環境の組み合わせによって歴史が展開するという仮説と、(2)歴史の主要舞台は環境の境域に立地し、その環境の境域は、前近代の農業遊牧複合地帯から近代の沿海地帯に移行するという仮説の提示とその検証である。

この作業によって、現代の都市問題と環境問題が、農牧複合地帯から沿海地帯へと歴史が拡大していく過程で必然的に生じた点も明らかになった。

(1)第1の仮説：前近代の歴史は、同じ環境と異なる環境の組み合わせによって展開する。

前近代におけるアフロ・ユーラシア大陸の各地域の歴史は、技術の未発達等によって、各地域の生態環境と分かちがたく結びついていた。

生業は環境によって決定され、異なる生業間の物産の流通こそが物流の根幹をなし、環境と生業を同じくする同緯度地域間の流通が、それを補う役割を演じたのである。

この状況のもとでは、人間活動は環境に即応することで初めて可能となり、現在見られるような都市問題や環境問題は、まだ顕在化していない。

(2)第2の仮説：歴史の主要舞台は環境の境域に立地し、その環境の境域は、前近代の農業・遊牧複合地帯から近代の沿海地帯に移行する。

第1の仮説から導き出される第2の仮説は、アフロ・ユーラシア大陸の政治・経済・軍事の中核地域が、前近代の農牧複合地帯（農耕地域と遊牧地域が複合する地帯）に接する都市網から、近代の沿海地帯に接する都市網へと転換する点である。

この転換は、人類の政治・経済・社会・文化制度の全体にかかわる変革をもたらした。

その変革とは、(1)商品流通の飛躍的増加と国家の財政規模の拡大、(2)商品品目の大衆化と社会の世俗化、(3)消費が生産を決定する社会から生産が消費を決定する社会への転換、(4)生態環境に依拠した交易から生態環境を超越する交易への転換であり、(5)人間の行動の主体化（伝統にもとづく行動様式から自発的な行動様式に転換）である。

ここで重要な点は、環境問題や都市問題が生まれ、その問題を認識する前提となる人間の主体化の進展は、このような歴史の主要舞台の転換に対応している点である。

要するに、現代の都市問題や環境問題は、政治・経済・文化の全体が絡み合う人類史の必然の結果であり、都市問題や環境問題の存在しない時代に回帰することは、今や現実的に不可能である。問題の顕在化しなかった「良き時代」を懐古するのではなく、人類史そのものが都市環境問題を生み出した事実をふまえて、問題への対処法を総合的に探る他ない。

以上の歴史解釈は、アフロ・ユーラシア大陸の各地域の歴史が、同じ構造をもつことを主張する。この見方にたてば、各地域を平等に比較して関係づけることで、人類史の叙述が可能となる。

このように、世界が共通して直面する現実に立脚して世界の成り立ちを分析することで、国境を超えた人類共通の歴史認識の構築が可能となる。同時に、都市と環境の歴史学は、われわれに、自分の暮らす地域の特色と意義を再認識させ、人類の一員であることを共通に自覚させるのである。21世紀の歴史学は、ここにある。

5. 得られた成果の世界・日本における位置づけとインパクト

本研究は、従来の一つの地域を絶対視しがちな見方、たとえば、西欧史や中国史、日本史などに収斂される歴史観を相対化する。各地域を平等に比較して関係づけることで、人類史の叙述が可能となる。人類という、より大きな次元に立脚することで、従来の各国史の競合を乗り越えることができる。

多国籍、多分野の出身者からなる本研究組織が、必然的に生み出さざるを得なかった歴史叙述の普遍性は、今後の国内外の研究に少なからぬ影響を与えていくと思われる。

6. 主な発表論文

(研究代表者は太字、研究分担者は二重下線、連携研究者は一重下線)

(1)**妹尾達彦**編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第2集〔増補版〕 国際シンポジウム特集』1-647頁、2009年。

(2)**妹尾達彦**編、中央大学文学部東洋史学研究室、『都市と環境の歴史学 第4集 国際シンポジウム特集』1-557頁、2009年。

(3)**新免康**、堀直他共編、NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点、『「ターリーヒ・ラシーディー」テュルク語訳附編の研究』xi+372+171頁、2008年。

(4)**新宮学**、東京大学出版会、鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史5 近世都市の成立』375-410頁（総409頁）、2005年。

(5)**田中俊明**、山川出版社、『古代の日本と加耶』1-106頁、2009年。

(6)**橋本義則**、東京大学出版会、鈴木博之他編『シリーズ都市・建築・歴史1 記念的建造物の成立』15-83頁（総390頁）、2006年。

ホームページ等

http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~hakuto/top/title_top.gif (中央大学東洋史学研究室)